

## 平城第352次調査（国指定名勝旧大乗院庭園）現地説明会資料

奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部

### 1 調査の経緯と経過

奈良文化財研究所では、本庭園を管理する(財)日本ナショナルトラストの委嘱を受けて、復原整備に向けた資料を得るために、1995年から継続的な発掘調査を実施してきました。今回の調査は、西小池(南池)の想定地を対象に、本年1月7日から開始し現在までにほぼ終了しています。調査面積は267.5㎡です。

### 2 大乗院と大乗院庭園

大乗院は、一乗院とならび西門跡とよばれた興福寺の門跡寺院です。平安時代にはじまり、当初は興福寺の北方現在の奈良県庁のあたりにおかれましたが、治承4年(1180)、平重衡による南部焼き討ちによって罹災したため、元興寺の別院である禅定院のおかれていた鬼蘭山(飛鳥山)の南麓に移り、ここを大乗院家と定めました(図1)。

宝徳3年(1451)の徳政一揆による焼亡後の復興では、尋尊大僧正によって、建物ばかりでなく庭園についても精力的な整備が行われ、南部随一の名園となります。このとき園池の造営にあたったのは、名匠とうたわれた普阿弥親子でした。普阿弥は足利義政に仕えて銀閣寺の園池を造ったとも言われています。室町時代の整備では、東の大池の北と南にある中島に西側から橋を架けたり、大池の西側にあらたに小池がつくられたりしました。室町時代に改修された庭園の基本的な姿は、江戸時代のはじめまで続いたと考えられており、江戸時代の大乗院の姿は、第15世隆温大僧正の描かせた『大乗院四季真景図』(図4)からうかがい知ることができます。

### 3 発掘調査の成果

(1) 西小池について 発掘調査は、庭園の整備事業に資料を提供する理由から、近世における大乗院庭園の姿を明らかにすることを目的としています。これまでの調査は東大池の周囲を中心に南岸から東・北岸へと進めてきましたが、1999年度からは西岸部を対象としています(図3)。この場所には、文献や絵図による研究から「東大池」に対して変化に富んだ景観をもつ「西小池」の存在が知られていました。けれども、西小池は明治時代の前半には埋め立てられ、わずかな窪地をのこして地上から姿を消してしまっていました。そのため、発掘調査による実態の解明が期待されました。

また、昨年度の調査からは、これまでの『大乗院四季真景図』をもちいた検出遺構の比定に加えて、江戸時代に写された平面図(『興福寺旧大乗院庭苑図』図2)と重ね合わせることで、より正確に遺構の比定、あるいは発掘前の推定ができるようになりました。事前の予測では、今回の調査地には、西小池南池の北岸および東岸、『四季真景図』に「ヲシマ」と記された中島の東半部、および「ヲシマ」から「連ナリハシ」によって結ばれた小島と対岸部、東の大池と西小池を結ぶ流路の西岸にあたる嘴(くちばし)状の岬などが存在するものと考えられました。調査の結果、これらの遺構をほぼ予測された位置で検出し、西小池の復原にあたり『庭苑図』の資料としての正確さをあらためて確認することとなりました。

① 西小池南池の北岸と東岸 南池は北池同様に地山を削りこんでつくられていて、地山が礫層となるところでは、この礫を池底の石敷きにみたくてしています。中島や岬の高さを考えると、南池の水深は20cm前後と浅かったことが推定されます。

南池の北岸は明治時代以降、広い範囲で削り取られていましたが、本来は勾配のきつい崖状であったと考えられます。また、約2mの範囲に石の集中する箇所があり、岩島状のものであった可能性があります。東岸についても、池底からの高さが1m程度認められます。池岸では、『庭苑図』に見られる方形の張り出し部を確認しました。さらに、3mほど東にあった汀線を、盛り土造成により西に移動させていることも判明しています。

② ラシマ 『四季真景図』に「ラシマ」と記されている中島の東側半分を南北6mの範囲で確認しました。ラシマは、昨年度北池で確認した「メシマ(女島)」に対する男島でしょう。池底からの高さは40cm。島は半球形に地山を削り残してつくられていて、周囲には石組がみられます。また、基底部の周囲には石や土を押さえるための長めの木材を多角形になるように置き、杭で挟むようにしてとめていました。

③ 小島(対岸部) ラシマから南に連なる小島あるいはその先にある対岸部について、建物の基礎の間に残されたわずかな範囲ですが確認することができました。その縁まわりには、石組に加えて直径4cmほどの白い玉石が撒き敷かれていました。

④ 岬 東大池につながる流路の西側で、地山を削り残した嘴(くちばし)状の高まりを確認しました。南北4m、南端で東西4mあります。周囲には石組が見られますが、ラシマや池岸に比べると石材はひとまわり小さいことがわかります。

かつて、西小池の復原を試みた庭園研究者の森蔵(もりおさむ)さんは、ラシマから連なる小島と嘴状の岬のありかたについて、3つの中島を石橋で連絡しつづつ出島状とし、筋違いに州浜を突出させる姿に、京都にある桂離宮の松琴亭前の天橋立と州浜の意匠とたいへんよく似ていることを指摘しています(図7.8)。

(2) 西小池南池の造営以前 南池の造営に先立つ遺構として、池底および池岸の石組の下で東西方向の溝を確認しました。これらの溝からは、平安時代・鎌倉時代の土器が出土しています。

(3) 西小池南池の埋め立てと飛鳥小学校 明治維新をむかえ、明治7年に門跡松園氏宅(内御殿・東林院殿)に更新舎小学が開設されます。明治8年には元興寺極楽院にあった研精舎と合併して鶴(かささぎ)小学校となりました。鶴小学校は、明治16年大乗院の地に新築された飛鳥小学校へと移ります。飛鳥小学校は、現在の紀寺町に移転する明治33年までこの地におかれていました。

今回の調査では、池を最初に埋め立てた土層をはさんで、その下層と上層で硯・石盤・石筆などの文具が出土しました。このことから、南池の埋め立ては飛鳥小学校の校舎を新築する時におこなわれた可能性が高いものと考えられます。

(4) 築山 東大池西岸にある築山については、植栽を保護する理由からトレンチ調査を実施しました。その結果、頂部で厚さ約1mの新しい盛り土がなされており、築山の南半部は現状よりもかなり低平なものであったことが判明しました。

4 まとめ 今回の調査では、100年以上ものあいだ地中に埋もれていた西小池の姿が、近世の絵図に描かれたままに確認されました。また、ラシマについて見られた護岸のありかたや、白い玉石を用いた装飾など造園の手法についても新たな知見を加えることとなりました。



図1 大衆院の元の位置と大衆院庭園の位置



図2 興福寺旧大衆院庭園

(田村剛「大衆院庭園の調査」『庭園』第21巻第3号 1939、より)

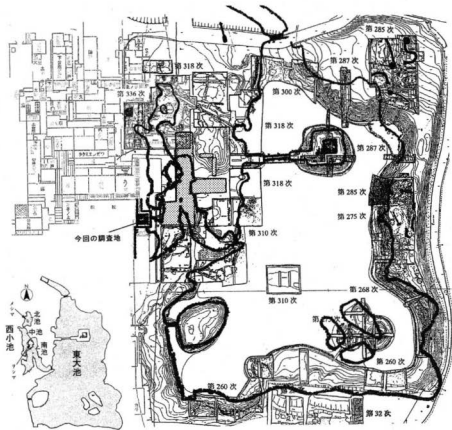


図3 これまでの調査地と『庭園』との比較

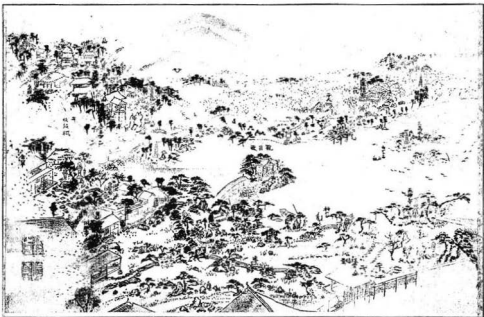
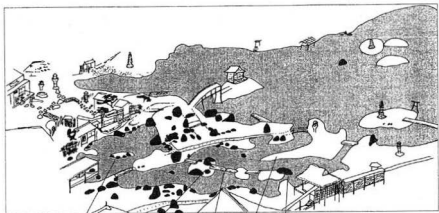


図4 大乗院四季真景図(興福寺蔵)



メシマ

ヲシマ

通りハシ

岬

白玉石敷

■ 石の表現

〰 水の表現

図5 『四季真景図』と今回の検出遺構

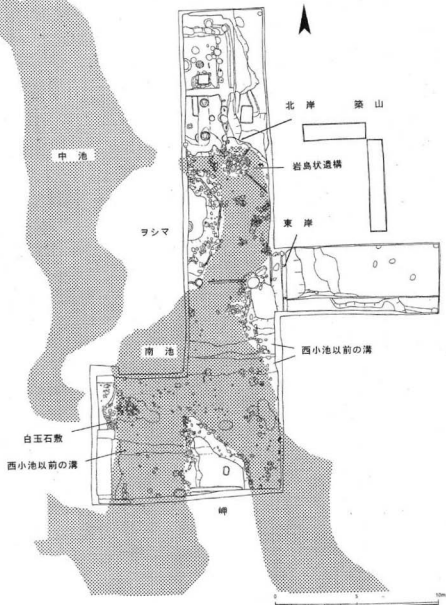


図6 今回の調査区と『庭苑図』による西小池の比較

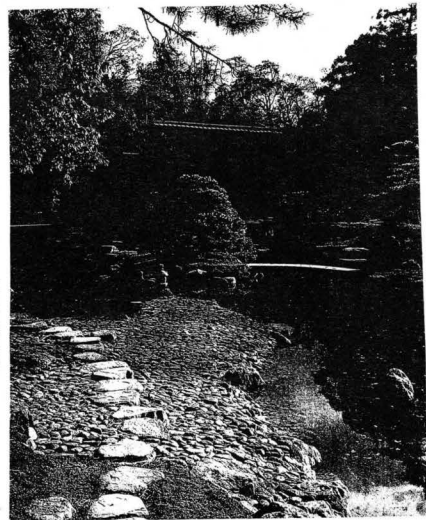
桂離宮庭園実測図



図7 桂離宮全体図(森羅編『庭園とその建物』至文堂 1969、より)



図8 州浜・天橋立・松琴亭(北より望む)  
(川上寅『桂離宮』小学館 1971、より)



十七世紀の建築家・造園家・設計家・藤田鳴鶴(藤田鳴鶴)の設計による庭園。この庭園は、日本庭園の歴史を代表するものであり、その美観と自然との調和が、多くの観光客を魅了している。